

皇紀二六七〇年七月十七日

大志塾 合宿 第一日 午前講義

## 『天命を見詰め、天命に生きる』

『経営学は人間学、磐石な土台の上に磐石な人生が築かれる』というふうになっておりますが、これに付いては明朝お話をさせていただきます。そして今ご紹介がありましたように、『天命を見詰め、天命に生きる』という表題で、今日はお話をさせていただきます。

皆さんがこの合宿を受けるにつきまして、熱い思いを書いてくださいましたので、此方もそれに応ずるべく急遽変更をいたしました。やはり自分自身を変えたい、新しい自分になりたいというお方が大変多うございましたので、そういう変化ができる。

私が四国から東京へ出て参りまして、まだ二十歳にならないときに、中央大学の代々木寮というところで、木川統一郎先生に世話になって、未だにお世話になっておりますけれども、その先生が寮監を兼ねておりました。大変厳しいお方で、時間を制限しておりますので、ご自分で自分のお部屋に籠ったら、電報が来ようという何があるかと絶対に連絡はするな。夜十時に五分くらい連絡時間を取るからというくらい、厳しいお方でした。ですから急用があっても夜十時までは待たなければならぬ。

しかしこの先生は毎日風呂へ入りに行くのです。近所に三軒ありまして寮生が五十名います。大体半分ぐらい、二十四、五名が毎日でかける。私は毎日付いていきました。というのは門を出るときに問題を出してくれるのです。そしてお風呂の中は喧々諤々です。お風呂を出たところではまだ喧々諤々やっていますけれども、東北沢の踏み切りのところまで来ると、先生が『今日の問題についての解答はこうであろうと思う』というのを毎日やってくれるのですね。私はそれが聞きたいために、毎日風呂へ一緒にくっついて行きました。そしてそれが終わると皆さんにとっては『惜別の歌』、あれが中央大学の寮歌でございますので、それを歌いながら帰ってくるというのが日課だった。

あるとき昼間に先生の所へ私がお伺いをしている時に、丁度本屋さんに来たのです。茶色い本を入れる大きなボックスがありますけれども、あれに一杯本が入

っておりました。それを置いていかれたのですね。そうしたら木川先生が月給袋を封も切らずにそのまま渡しているのですね。ビックリしましたけれども。

それで先生に本屋さんが帰った後、『先生、本代って大変なのですね』と言ったらその時に『本代が大変というけれども、自分がその本からどう価値を見つけるかということが、大事なのだよ。例えば百円の安い本であっても、そこから得るものがなかったときには、その時間と労力と、たとえ百円であってもこれは高いものになるのだよ。だけど例え一万円の本であったとしても、そこから自分が学ぶものがあれば、これほど安いものはないのだ』。まだ十八、九の私にとりましては将にカルチャーショックでございました。価値観とはこういうふうに見るのかということ、私にとっては目の鱗が取れた瞬間でございました。それ以来その先生とのお付き合いでございます。

この先生が民事訴訟法の担当でございましたけれども、民事訴訟法では東大の三日月さんと言って法務大臣をやったそのお方と肩を並べて、大体日本の民事訴訟法を代表する先生ということで、民事訴訟法施行百年祭の時には、木川先生が司会を勤める、議長をやるというふうなことで、日本では余り知られていないけれども、ドイツでは勲一等を貰っていますからね。そういう先生でございます。

そういうふうには価値観というものは、ご自分の人生に役立つもので、そういうものであれば価値としては高いものあるいは安いものということ、ご自分自身にあるのだということでございますので、その積もりになって、今日は素晴らしいものを身につけていただきたいというふうに思います。

今日は『天命を見詰め天命に生きる』という題でございますが、仕事を通じて人生を完全燃焼する。そして世の中に貢献をするという事が大事でございますけれども、中々人生を完全燃焼したというお方は大変少ないと思います。そこで先ず『仕事とは何ぞや』何だと思えますか、仕事とは？

(中 略)

仕事は何の為に？

金の為にという人も結構いるでしょう、世の中にはね。世の中の役に立つ為に。人それぞれ天分というものがあって、その天分を通じて、そして仕事そのものを

全うする。だから気力・体力を絞って働くにしても、その気力・体力でやるけれども、その大本にあるものは一体何なのだろうか、それを動かす原動力は何なのだろうかということになるのですね。

中には欲望あるいは食うために仕方なくやるのだと。これは時期的にそういう事もあるのですよ。人は大変な時にぶつかってしまふと、なりふり構わず食うためにとに角生きていかなきゃいけないという時期がある。しかしいつまでも欲得でやろうというのは、どうかなあという気がします。自分の使命感によって遣るというふうな事もあるかと思うのですね。

これも人によって違いますけれども、若い時期に自分の天命は何だろうかとか考える人もあれば、社会的にも経済的にも成功したように見える。それで自分もある程度納得のいく人生を歩んで来たな。だけど自分の人生これで良いのだろうかとかふと思うことがある。年とってから思うこと、人それぞれである。若いときに思う人もあれば、年取ってから思う人もある。しかしそういうこれでいいのだろうかと思うということは、何となく満たされないものが、経済的にも社会的地位も得ているのだけれども、何となく満たされないものがある。それは天命を果していないからということになるのではないだろうか。

ここでもう一度皆さんにお聞きしますけれども、自分は何の為にこの世に生まれてきたと思いますか。何の為に生まれてきたと思うでしょうか。人は何の意味も無くこの世に誕生しているのではないのですね。必ず成すべき事を託されて、この世に生まれてきている。それに気がつかずにそれを成し遂げないまま、この世を去るのでは、この世に生まれてきた意味がないとすると自分は何の為に生まれてきたのだろうかという事を、もう一度見直して欲しい。

(中略)

それじゃ今の時代に何故生まれたのだろうか。

というのは、歴史から見ても、それぞれの時代に、それぞれ大きな転換期というのがあるのですよね。そういったときに、それぞれその時代を動かした人がいる。たとえば聖徳太子がいるとか、戦国時代であれば信長だとか秀吉だとか家康だとかという人がいた。

明治維新に付いても、西郷隆盛だとか大久保利通であるとか明治天皇がいた。

或いはその前にも吉田松陰先生がいたというふうには、それぞれその時代を動かす方が居たのです。今はそれ以上に大事な転換期なのだけれども、そういう人がいないのです、残念ながら。戦後六十年間ズル・ズル・ズルツときて、そして二十七年の四月二十八日に、日本が独立したにも係わらず、サンフランシスコ条約で独立したにも係わらず、憲法も変えなければ、一切その時のままということで来ている。現在になつてゐるわけです。

民主党が良いかと思つてみんなが託してやったけど、全部期待は裏切られてしまったという事で、この間の参議院の選挙ではガタ落ちになつてしまつたという事で、この日本を救う者がいない。この点はまた後で申しますけれども、今の時代に何故生まれたのだろうか。そういつた事を考えていただきたい。やはり今大事なときと言うけれども、この時期に生まれた意味がなければ、この時代を良くする事もできない。

ですから皆さんが江戸時代に生まれたとか或いは奈良時代とか平安時代に生まれたら、その時代の役目をすべきであつて、自分がこの世を去つてから後に、ああしたい・こうしたいと言つても、間に合わないのですよね。自分は何をすべきなのだろうか。この時代に生まれてきて、自分は何をすべきなのだろうか。

(中 略)

皆さんは経営者でございますので、自分は何の為に会社を経営しているのだろうか。こういった事を考えていただきたい。これは人に聞かせようという奇麗事でお答えいただくのではなくて、自分の本音、自分の生の声でお答えをいただければというふうに思います。奇麗事を言う方いるけれども、奇麗事を遣つていと、本物ではございません。皆さんからの十ヶ条或いは心構えというものを讀ませていただきました。中には本当に本音で書いてくださった方いらっしゃいます。本音で書いてある人というのは、具体的に書いてあります。本音で無い人は抽象論で書いてあります。すぐ分かります、奇麗事ばかり並べていますから。そういった意味で物凄く具体的で、なるほど申してくださる方が何人いらっしゃいました。素晴らしいと思います。

極端なことというとな入社社員を採用したときに、毎日これを唱えよと言つたら、自分の会社の意味は全部分かるよという、素晴らしいと思いますよ。そういう具體的なものを挙げていただきたいというふうに思います。

みなさんご自身も抽象論で書いた時は、本物でないということ。裏返しをすると、言葉はきついでいけれども、この人は経営していないなあ、経営に携わっていないなというふうに思います。本当に経営していたら、死に物狂いで遣っている本音で書かれるはずですから。それを抽象論で書くということ自体が、仕事をしていない人、将に机上の空論で書いているな。ですから知識としてあちらから引っ張ってき、こちらから引っ張ってきという形になってしまいます。

そうではない。仕事をしている人は、自分がこれで困っているのだよ。だからこういうようにしたいのだという本音が出てくるはず。そこが大事なのです。苦労した人ほど本音が出てくるのです。牛嶋さんも会社の本質聞かれて、おれ、そんなこと考えたこともないよというので、何ヶ月間か苦労したのですよね。そういうふうに苦労した後に出てくるものです。苦労しないと中々見出せないというふうに思います。

そしてみなさん自身が、天命を知る機会というものが有ったかどうか、今までに。先生、天命というけど、天命そのもの考えたことないよというふうな、そういう天命を知る機会が有ったかどうか。逆に言うと、天命ということに付いて、話してくれる機会もない。またそんなことを教えてくれるところが無い。したがって自分の天命を磨く場というものがなかったよ。多分みなさんそう思われると思う。本当の意味では、天命というものを聞く機会も少なかったし、磨く場というものに出会わなかったのではないかと思う。

一口に天命と言っても、ご自分自身の個人の天命、それから自分が経営者であるという天命、それから企業、会社そのものの天命、それからどの時代に生まれるかという天命、更にはどの家筋に生まれるかという天命、更にはどの国に生まれるかという天命、いろいろあるのです、天命と言っても。それで先ほど今の時代に生まれた意味をお聞きしたわけです。

昔は世の中のお役に立つ人になれという事を教えられたはずでございます。各家々に於いても、学校に於いても、世の中の役に立つ人になれ。そういう立派な人になれよという事を言ってきたはず。しかし世の為人の為にということが出来ない人は、せめて迷惑を掛けるな。迷惑を掛ける人だけにだけはなるなよという事を言われたはずでございます。

今は学校教育において、人より一点でも多く取りなさい。だから勉強しなさいという事を言う。中には人を蹴落としてでも合格しなさい。誰それちゃんが通るといふことは、あなたが落ちることだよというふうな教え方をしてしまう。学校の先生も進学のと きになると、中学から高校、高校から大学というふうなときに、どういふことを言うかというのと、『貴方の点数なら、この学校なら受かるよ』という事を言うのです。

そうじゃないのですよね。逆なのです。貴方はこういう天命を持って生まれているのだから、だから貴方は将来こういう学校に行きなさいよ。そのためには今の成績では大変ですよというふうな指導しなければいけない先生方が、貴方の今の点数なら、この学校なら受かるよ。確かに受かるということで、受かって行ったけど面白くない。夏休みが終わると来なくなる生徒が多いということになっているのですね。これが現状なのです。

そういう天命からかけ離れた生活とか職業というものを、学校自体が勧めているよということ、ようやく最近になって心の教育が必要だと言われるようになってきたけれども、私は心の教育では駄目だよ。魂の教育を遣らないと。心の教育と云うけれども、皆さん一大決心したのですよ。だから磐石なのかと思ったり、今日は疲れたから止めたとか、そうは言ったけど、これはどうも難しそうだから止めたとか、あつという間に変わるのですよ、心というのは。

皆さんは一大決心をしたと云うけれども、私は聞いていて、一大決心したのか。じゃそのうちにこの人は変わるだろう、揺らいでくるよと。皆さんの思いとは違うのですよね。一大決心をしたら、絶対これで揺るがないよという積もりで一大決心をしたと仰るのだけれども、しかしそれはすぐ揺らぐよ。これは後でお話します、何で揺らぐのかという事を。

そして、天命には寿命と使命の二つが有りますよ。寿命というそういうもの。知識としては天命には寿命と使命の二つがあるという事を受け取ったわけですけども、それでは皆さんにお問い掛けをしますが、貴方は何歳まで生きる積もりで、人生設計をなさっているのでしょうか。何歳まで生きる積もりで、人生設計していますか。

(中略)

それぞれ自分は何年生きるという人生設計しているのか。皆さんの人生設計というもの自体が、何年を前提にしてなさっているのか、人によって全部違うでしょう。そんなこと考えたことないよということばかりで困るだろうけれども、それを前提に考えないといけない、裏返しをすると。

何故こういふこと言うかというのと、その為にはみなさん健康管理をして欲しいということなのです。健康管理をしないで、抽象論で俺は何年まで生きるのだと言ってみても現実味がないのですよ。しかし健康管理をやつてこうやっているから、自分は何歳までは生きられるよという前提でやつていく事が、可能になってくるはずなのです。だから健康管理を充分にしていたきたい。

その寿命の範囲で何を遂げたいと思つていますかということですから、漫然と生きて何時の間にか年を取つたというのでは、人の世界に生まれてきた意味が無い。したがつて自分から世の中を動かしていこう。そういう大きな目的をもつてやつて行つて頂きたいというふうに思います。

(中 略)

したがつて寿命という天寿を全うするという事が非常に大事なのだけれども、殆んど今、天寿を全う出来ている人はいないと思います。そういう意味ではどんなに遣りたい、どんなにしたいという事があつても、病気になつたり死んでしまつたら成し遂げることは出来ないのですよということですよ。

(中 略)

そういう意味で天命を生かせる時期、期限には限りがありますよ。人生の中で本当に自分が世の中に役に立てる時間はどれほどあるのだろうか。赤ちゃんとき、これは逆に両親をはじめとして周囲の人に全面的に負ぶさるしかないのです。おしめを替えるといつても、自分で替えること出来ないのですから。徐々に大きくなつていって、自分が下着を着るとか、靴下を履く事が出来るとかといふふうになつて行くわけですから、赤ちゃんの時は全て誰かにして貰うのだと。それで子供になつてやつとこさ下着が自分で着られるようになるよといふふうな形になつてくるわけですから、その頃はまだ人の役に立つどころじゃない。やつとこさ自分のことができるようになっただけということ。

そういう意味で十五歳というのが元服、大人になったよということですね。これを昔は大事にしたのです、男性は十五歳、女性は十三歳、十三参りという事で大事にしたのです。典型的なのは十五歳で石清水八幡様で元服をした八幡太郎義家ということになって、源氏との繋がりが出来た。このくらい大事にしたのですよね。

そして男の厄年はと言うと、それから十年二十五歳で、その次は四十二歳、ここで大役を貰うわけですよ。一生の中で一番大事なものはこれだよということ。その次が六十一歳、還暦の後ですよ。また元へ戻ったよということ、多分本来ならこれで隠居だよという意味だったでしょう、人生僅か五十年の頃ならね。今はそうはいかない。八十歳ぐらい生きていますから、六十一歳は厄年そのままになっていきますけど。

しかし考えてみると、サラリーマンでは五十五歳、場合によっては六十歳のところもあるけれども、五十五歳で定年だということになると、四十二歳の大厄からでは僅か十三年でリタイアをしてしまう。それで本当に天命全うできるの？十三年しかないのだよ。

そうすると本当にないでしょう期間。有りそうでいて無いのです。だから十五歳の元服の時に自分の使命というものが分かって、本来は十五歳のときに自分の使命に向かっての学校を選んでいくのだよと。これが今中学三年生ですよ。だからこそこの学校なら受かるよではなくて、貴方の天命はこれなのだから此方の方に行きなさいよという事を言うのが、先生でなければいけないのです。

ところがデモシカ先生では分からない。そういうことで今の教育自体が間違っているのではないかなあということ、教育問題を引っかけたときには、学校の先生には大変厳しい話を私します。今の文部科学省は、先生なんか一人も要らないのだよ。教科書の代わりにビデオを吹き込んでおいて、ビデオを流せば良いだろう。そうしたら先生の格差というものはないわけです。全国一律に流すのですから。生徒さんはそれを聞いて、分からなければもう一回掛ければ良いのです。先生みたいに残業手当くれと言わないですから。分かるまでテープ掛ければ良い。その方がよほど良いわけです。山の中であろうと都会であろうと一律の授業できるわけですから。良い先生だ・悪い先生だと言われる必要もない。同じテープを聞くのだと。それでいいのか？



授業はそれで出来るだろうけれども、個々の生徒十人十色と言うけれども、三十人、四十人いたらみんな違うだろう。その個性の中から、この人の天命いわゆる使命は何なのだろうかを見届けてあげるのが先生なのだよ。それが出来ないのなら先生なんか辞めてしまえと教育論の時は言うてしまうのですよ。先生には厳しいけれども、それが本来、人生のうちたった一年間と思うかも知れないけども、成長期にある十五歳までのうち一年間というものをやる。子供さんにとっては人格形成の大事なときなのだ。その一年間を預かるのだという積もりで先生はやってほしい。だから先生はサラリーマンであってはいけない聖職者だよ。先生は聖職者でなきゃいけないのだ。デモシカ先生で月給さえ貰っていけば良いよと言うのでは困る。

子供さんにとっては人格形成の大事な時期ですから、それをどう指導していくか。だから先生が必要なのだよ。本来ならそれが出来ないのならビデオだけで良いのだよ。あなたの存在価値はないのだという事になるのだというふうなことでね。先生には厳しいことを申し上げます。しかし今言ったように四十二歳で本来の大役を貰ってやるとすれば十三年しかない。それでリタイアというのは勿体ないではないか。

しかし実際の現実の世の中では、四十歳くらいから薬が手放せない人も結構居るのです。健康面で見るときに五十歳ぐらい或いは五十五歳ぐらいの定年にせざるをえないような人もいる。経営者の側から見たら、永遠にそれでずーといたら困るのですよ。体の具合が悪いのに、それで定年が八十なんて言われたら困りますよ。五十位からヨボヨボになっているのにというのは、経営者としてみれば困る。

でも逆に元気であれば『うちの会社では何歳になろうと働いて貰いますよ』と。元気であれば結構だと思うのですね。そう言ってあげると、本人も健康管理するからねえ。俺は何年でもここへ勤めたいのだと。その代わり元気になっちゃいけない。一生懸命健康管理するようになるだろうと思う。そういう意味では人それぞれです。五十歳ぐらい超えてくると、あの人若いなあと思う人もあれば、五十歳で豪い年とっている人だなあ。実際にいたのですよ、家へ来た人で。豪い年とっているなあ。

(中略)

ここで一つだけ歴史の話を入れて行きますけれども、西郷隆盛という人がいました。日本人は判官鼻肩でございますから、大久保利通はどちらかというと評判が悪い。明治維新を支えてきたのはこの二人だったのだけれども、西郷など戦ったことになってしまつて、大久保の方は大変評判が悪い。そこで大久保を言い出したわけではないのだけれども。

大久保利通と西郷さんは同じ薩摩の出身で仲が良かったのです。しかもお互いにツーカーで物事を進めて来られた。ところが最後になって袂を分かつことになったのはなぜかということですね。それはヨーロッパの方へ皆使節団で行つた。その時留守を守つたのが西郷さんだったのです。その間に朝鮮をやつつけてしまおうという事で征韓論を唱えたのですよ。そしてそれが通つて、いよいよ自分が行くという時に、欧米使節団が帰つて来たのです。そして全部に反対されてしまつた。決まっているのだよ、俺行くことに決まつたじゃないか。

ところが反対という事になって、それで西郷さんは『それなら、もう俺は明治政府にとつて役に立たないだろう。薩摩へ帰る』と言つて帰つてしまつたのですね。ところがその時の局長クラスの連中が皆辞めて帰つてしまつたのです。西郷さんについて。それが大きなあれになつていったのです。私学校というものを作つて、そういうお方です。

ところが大久保利通というのは、いわゆる行政に長けた人であつたために、直ぐ手を打つたにも関わらず、西郷さんのことについてはまるきり手を打たない。同じ同郷だから手を抜いているのじゃないかと言つて、今度大久保利通の方がやり玉に挙がつたのですよ、新政府の方から。今までどんどん・どんどんと先手・先手と手を打つていたのに、西郷だけをほつたらかすというのは、同じ郷里で同じ仲間としてやってきたから、それで手を抜いているのではないか。場合によっては、お前も後ろで影引いていゝのではないかと言つて、逆にお前も新政府覆す積もりではないかということまで言われてくるようになってしまつた。

それで大久保は何をやつたかというのと、いわゆる密偵を送つたのです。五十人くらい送つた。その中の一人(なかのけいぶ)というのが捕まつてしまつたのです。何を遣つて捕まつたかというのと、薩摩にあつた弾薬庫それから武器庫が危ないというので、五十人もいた警察官に、大阪へ内密で引き揚げさせたのです。それが見つかつてしまつたです、西郷に。それで拷問にかけられたときに何と言つたか

というと、(ながのけいぶ)が薩摩の私学校を潰して、西郷隆盛を暗殺せよという命令を受けてきたと言ってしまったのです。

それで私学校の連中が、このままだと新政府に西郷先生は殺される。要するに殺せと言われてきたというのですから殺される。だから先生発ってください。もし先生が発たなくても、自分たちが守って見せます。自分たちは新政府に対抗しますという事を言ってしまったものですから、西郷さんが『おいどんの命は、お前たちにまかせる』と言ってしまったのですよ。それで薩摩を出るときは五千人だったのだけれども、熊本へ着いたときは三万人、田原坂へ行ったときには四万二千人。全国からドンドン集ってきてというふうになって行った。西郷さんの頭の中には熊本城なんていうのは一日もあれば落ちるよと思っていたのですよ。

なぜかという廃藩置県の後熊本城は不要のもの、壊しましょうという事になったのですよ一度。だけど新政府の方で、今直ぐ壊さなくても、壊すのはいつでも壊せるから、置いておこうという事で、偶々残ったのが熊本城だったのです。これがある意味で天下分け目だったのですよ。熊本城が落ちていたら後は萩だとかそちらの方で長州でしょう。あつという間に新政府は危なかったのです。

では何故熊本城は持ったのか。土佐藩の谷干城という方が、一生懸命になって頑張ったのですよ。何故頑張ったか。余計なこと言わなきゃいいのに、余計なこと言ったのですよ、薩摩のあれが。谷干城に『お前らみんなドン百姓の集りだろ。俺たち侍に勝てるわけじゃないじゃないか』と。それでドン百姓がみんな必死になって頑張った。そんなこと言ってなければ、危ないよと言ったらパーと引き揚げてくれたのに、お前らドン百姓だ、何が出来るかとやったので、意地になって頑張ったのですよ。

前には総理大臣の一言という話をしたけれども、余計な一言というのは、相手を奮い立たせてしまうのです。ドン百姓に何が出来るか。それが熊本城を守った大きな原因です。そして西郷ドンが征韓論に敗れた。朝鮮征伐しようと言ったのに敗れて帰った理由は何か分かりますか。良く皆さん耳にする言葉ですよ。「百聞は一見に如かず」みんなは使節団に行って、欧米の文化を見てきたのです。西郷さんは一人日本に残ったために、外国文明を知らなかった。

したがって戻ってきた連中が、今朝鮮やるというのは危険だよ。朝鮮には清国が付いている。それを通じて欧米の武器弾薬というものが入ったときには勝てな

いよ。西郷さんはどちらかというところ、自分が交渉に行く。何で自分が行くかといったら、向こうは俺を殺すだろう。殺したら日本の参議を殺したという事で、攻撃できる口実が出来るだろうというのが、西郷さんの意思だったわけですよ。ところが欧米を見て来た人は、全員がこぞって反対した。西郷さんは知らないから『百聞は一見に如かず』将に見て来た人。風聞で聞いたって駄目ですからという事に敗れたのですよ。

しかし私から見ると一見は体験に如かずですよ。百聞は一見に如かずだけれども、一見は体験に如かずです。体験の方が上ですよ。だから何もしなければ体験できないのですから、それでやりなさいよと言う。百聞は一見に如かず、一見は体験に如かずですよ。体験することが大事なのです。だから体験させてあげることでですよ、社員の方にも。そういうところが大事だというふうに思います。

そういった意味での皆さんにとって、ただ百聞は一見に如かずという言葉を感じるのではなくて、その一見に如かずというけれども、西郷さんのこれが当てはまっているよというふうにして裏付けをしておけば、皆さんの印象に強くなると思います。しかもその一見は体験に如かず。したがって皆さんの会社においても、本人はもとより、経営者は元よりだけれども、社員の皆さんも出来るだけ体験させてあげると良いですよという事です。

明治維新のときにいわゆる諸藩という事を言った。三百諸という事を言ったけれども、皆さんは一国一城の主という事を聞いたことあると思うのですけれども、どうでしょうか。一国一城の主とは何ですか。どういう事でしょうか？

昔は一つの国の中に山城が一杯あった。一つの藩の中にも山城が一杯あったのです。それを徳川家光が一つの国にはお城は一つにせよと言って、後全部壊されたのですよ。だから一つの国には一つの城しかなかったのです。ところが後の人が一国一城の主になりたいという使い方をしていたのです。元の意味とは全く違った。一つの国には一つの城しか作ってはいけないよというのが、一国一城の意味なのです。

ところが殿様になりたいという事で、一国一城の主になりたいというふうな使い方の意味が変わってきた。だから山形とか新潟の方では本間様には及びませんが、本間さんというのは大地主ですよ、山形から新潟にかけて。本間様には及びないけれども、せめてなりたや殿様に。殿様というのは一国一城の主なのだから、

その本間さんのもっている土地の中には殿様が何人いるかわからないほど広い土地をもっていた。だから本間様には及びもないが、本間様ほどのことは望まないけれども、せめてなりたや殿様に。せめて一国一城の主ぐらいにはなってみたいなあ。そういう歌までできたのですよ。そういうふうなことで、元々の意味が変わって使われることがある。それも良く気をつけてください。

そういう意味では今が一番大事な転換期なのに、日本を支えてくれる人はいないよ。重箱の隅をつつくような、相手の荒さがしをするそういうような人はいても、世の中を動かす力、時代を導く力を持った人がいない。大変残念だというふうに思います。

なぜか、ここが大事なのですよ。ただいな・いなと言って落胆しては駄目。今から十年ぐらい前に、もう日本は駄目だという人一杯いた、文化人の中で。駄目だ・駄目だと耳にタコが出来るほど駄目だと言われてしまっただけです。ですからね。こちらが一生懸命になって、こんな日本では駄目だから遣ろうと思っているところに、もう日本は駄目だ・もう日本は駄目だ。そんなこと聞きたくない。今駄目だからこそこれからこうしなければというのが欲しいときに、それを言う人居ない。みんな駄目だ・駄目だと言う。そんなこといったら言霊の上でも駄目ですよ。言葉遣いそのものに魂があるのだから。もう日本は駄目だと、文化人がみなそう言った。一番困ると思う。だからそういう意味では、何故日本を救う人がいないのだという事です。

一番最初は誕生の時。子供さんが生まれる時。ここに重大な問題がありますよ。これは産婦人科医の罪ですよ。要するに勝手に出してしまおう。胎児そのものは、まずこの世に生まれたときに、まず生きていけるかどうかという、そういうところから出来てくるのですよ。だからまず体を作って行くのです。次々と。そういうふうになっていって、そしてやがて心臓とか目とか全部出来てくる。いよいよという時になって、その人の天命が入ってくるのです。

まずその人自身、個人の天命が入ります。次に家筋の天命が入ります。さらにその人がこれから役目を持つとすれば、その役目についての天命が入ってきます。その天命が大きければ大きいほど後になって参ります。だから国を担うような天命というのは最後になって参ります。したがって一週間、十日、場合によっては一ヶ月でもかかる人が、本来ならいるはずなのです。

ところが今は産婆さんの方で予定日というのを決めて、予定日を一日でも過ぎたら大変だと言って、出産させてしまうのです。これから天命が入ろうとした時、その人は生まれていないので、それで入らない。おまけに不心得な産婆さんは、今度の土日仲間とゴルフに行く。だから金曜日に全部出しておけ。土日の予定者全部出せ。こういう状態だから、天命として大きなものを貰う人は、貰えないままこの世に出てきてしまうから、まずここで大物がいないという事になるのですね。

次に家庭教育、学校教育ともに含んで、親御さんが今天命があるなどと知らないから、そういう教育は全然施さない。この子にどうしてあげたらいいかという事を全然考えない。学校でも今の点数ならどこなら行けますよという事を言うけれども、あなたはこういう方向に向いているのだから、こちらへ行きなさいよ。そのためにはこういう勉強をしないという指導はしてくれない。したがって成長期においても、いわゆる得るものがない。大きくなっていくものがない。したがって本人も周囲も天命に目を向けることさえできないのだよ。こういう事になってしまう。したがって今は天命でない人が政治を行い、教育に携わっている。

(後略)